

7・6「ゲバ杜」批判シンポ終了と今後について・御礼とご挨拶

2024年7月13日

【7・6「ゲバ杜」批判シンポ終了と今後について・御礼とご挨拶】

7・6反「ゲバ杜」シンポは、おかげをもちまして成功裡に終了いたしました。会場は定員の90名を上回る老若男女十でいっぱいになり、活発で有意義な議論が展開されました。参加された皆さま、パネリストの皆さまには、篤く感謝申し上げます。終了後、直接間接に、批判も含めた様々なご意見を頂戴しておりますが、肝に銘じて、今後の展開を行ってまいります。

シンポ終了翌日から、わたしたちは、本シンポ記録を中心とした、航思社よりの書籍化の準備を、本格的に開始しております。この書籍化は、単に映画「ゲバ杜」批判というだけではなく、そこに描かれていない山村(梁)政明の自殺をも包摂しながら、それらの問題が今の政治・社会・文化運動にどうかかわってきているかを、広く、そしてできるだけ深く論じるものになるでしょう。多くの書下ろしを含みます。本シンポにご来場いただけなかったかたも、この書籍化をご覧ください。

最後に一言。本シンポに病軀を押して参加くださった1967年10・8羽田闘争参加者1967年10・8羽田闘争参加者酒井杏郎さん(1968年日大全共闘副議長・法学部闘争委員会委員長)さんが、終了後の二次会で立ち上がり、代島治彦監督の前作映画『きみが死んだあとで』にかかわる同名の著書(晶文社)に対して、きわめて重要な告発を、声を振り絞るようにしてなさいました。10・8の死者・山崎博昭にかかわる重要な証言であり、それに応接する代島監督への血を吐くような告発でした。これについては、7・6パネリストの一人である河原省吾さんが、すでにX上で言及されており、また、詳細は別途公にされるとも聞いています。委細はそれにゆずりますが、思いもかけぬ体験であり、シンポの趣旨とも隣接する事態なので、あえて記しておきます。【7/6ゲバ杜シンポ実行委員会】

「映画『ゲバルトの杜』を徹底批判するシンポジウム」2024年7月6日

パネリスト:

絃秀実、菅孝行、大野左紀子、照山もみじ(金子亜佑美)、河原省吾、花咲政之輔。

主催者やパネリストを合わせると100人ほどが集まった盛会であった。多くは日大闘争組を含む70歳前後の頭の白い者で、あとは『情況』編集部の若者や花咲組と思われる中年男女だった。

パネリストの発言をランダムにまとめると、要するにこの映画は「鎮魂」と云うテーマが色濃くて革マル派のリンチ・テロへの批判や「内ゲバ」そのものの本質論議、早大解放闘争における自治会再建運動の成否などの重要な政治的的局面を全部脱色している、となる。

その上、後半において東大革マル派の死者二名問題にすり替わり、論者の内田樹氏、石田英敬氏にしてもその周辺に居た革マル派であって、そこに川口君殺害実行者の一人のSの自己批判書で締めくくりになり、革マル派擁護とも言える面がある。更に、現在の早大の状況を平和とみならず対比があり、川口君事件以降も続いていたノンセクト運動を捨象し、奥島総長による革マル派追放が同時にノンセクト諸派の叩き出しでもあった史実を無視している。新入生歓迎でビラを巻いた学生が逮捕されたなど、学内規制はより厳しくなっている。およそそのような論議であった。

細かいところでも結構面白かった。大野氏は樋田君と同じ高校卒で、しかも父親はその教員をしていて樋田君在籍の頃に居た。生徒会長として樋田君が制服廃止をやったとあるが、実はその数年前から私服は黙認状態で、それを最後に制度として廃止したに過ぎない。更に重要な

はその高校では毎年のように卒業式粉砕闘争があったがそれに触れていない。新左翼系の運動は書きたくないのではないかと、これは全く『彼は早稲田で死んだ』にも当てはまる。

以下、パネリストの発言のランダムなまとめ。

作り手や著名人の発言には革マル派に対する欲望を感じ、革マル派に対して「発情」しているように見える。最後の革マル派二名の受難とSの自己批判書の所で、「革マル派物語」として終わっている。

樋田毅の「寛容」は結局、早大管理体制をも認めている。ノンポリに対して政治活動をやめようと云うメッセージでしかない。

早大当局へのインタビューがない(ここは会場から拍手)。拒否されるにしてもこれが一番重要だった。革マル派へのインタビューもない。再現ドラマはその不可能性を出すためにやるなら良いが、報道によくあるような犯行現場の劇中劇でしかない。「寛容」は権力が使う武器、寛容という平和主義。そうした管理された平和と戦うのが社会運動だ。全共闘のポツダム自治会粉砕で、1960年代半ばで学生自治会は実質的に機能してなかった。川口君事件後の早大解放闘争は、それでも自治会再建で闘わざるを得なかったと言える。

若い役者が、そういう「内ゲバ」的状况が現代にどのように繋がっているのか、という本気の良い質問をしたのに、池上彰が「机と椅子が床に固定された」と受け流し、周囲で笑いが聞こえるなど、鴻上尚史の対応も悪い。

樋田本の第五章と大岩インタビューに違和感が残る。統一教会が『彼は早稲田で死んだ』を配布していた事に驚いた。確かに革マル批判、新左翼批判はしているが勝共連合批判は書いてない。第五章では統一教会部分を書いてない。

「ヘルメットをかぶった君に会いたい」の「君」はリンチ実行犯の一人で、劇を任せた時に代島監督は鴻上尚史が「燃えるだろうな」と言っている。結果、劇でのヒロインはその女性になっている。

異色の発言:「女闘志」は内輪で使う言葉であり、彼女が革命をやっているとセクトを代表させている。それともう一人の女性・吉岡さんが革マル派の部隊展開が見事だと感心していた。そのどちらも男性にとってありがたい表象になっている。

あと中島梓が早稲田という共同性や早大解放闘争の一般学生についていけず、運動に参加できなかった。そこが逆に表現への限りない鬱屈した原点となっており、語り尽くせずに終わっている。(遺作に未完の草稿が残っている事を指している。)

この辺は、三田誠広が『僕って何』で芥川賞を受賞して我々世代に心底軽蔑されているのだが、三田と中島梓は対談などをやっているらしい。中島梓を論評する際に早稲田解放闘争の検証は役に立ったのだろうが、中島梓が早稲田開放闘争にとって何であったか、となると私たちには何の言葉もない。ついでに言えば、当時、三島由紀夫夫人が第二文学部に在籍して文学を研究していたが(私もスロープで見かけた事がある)、それが三島由紀夫の文学にとってどうであるかは何の関係もない。これは村上春樹文学にも言える。第二次早大闘争と川口君の死と早稲田解放闘争が彼に大きな痕跡を残しているのは、私も自治会副委員長として村上君と立ち話をした事があるので確かである。しかし、文学的営為や作品は後からのものである。

大事な事は、早稲田解放闘争の後から出てくる作品、『彼は早稲田で死んだ』『ゲバルトの杜』『海辺のカフカ』などが、早稲田解放闘争を今振り返る際に、私たち一人一人とそれら作品との間に相互の往還ができるほどに、いかに実録的・文学的・表現的に深く豊かであるかどうかであろう。『彼は早稲田で死んだ』は民青的立場から見た実録にすぎず、『ゲバルトの杜』は更に革マル派を容認し鎮魂を見る者に強制し、被害当事者やその周辺の人々を侮蔑している。『海辺のカフカ』は、死者たちが魂の深海において和解し再生していく希望を編み上げて、それを将来世代に託している。

これらは私の理解と感想である。このシンポジウムで何らかの共通認識が固まったと云うほどではないし、主催者としてのまとめはそれとして後日出てくるだろう。シンポジウム自体を纏めて出版する計画もあるらしい。うまく運ばれることを願っている。

この集会進行の感想としては、もう少しフロアーから参加者のご意見が聞ける時間がほしかったこと、主催者側があまり仕切らぬ方が良かったこと、かな。司会役抜きにパネリストの一人(花咲氏)が映画に出演した者を詰問し、もはやバレバレで最前列に座っていた私が発言をしたのだが、まるで被告人みたいだった。「いきなり被告人みたい」と言ったら会場がドツと笑って和やかになったから良いものの、ああいう断罪調は仲良くするためには良くないな。

一緒に信濃忍拳の空手の稽古をした菅孝行氏と50数年ぶりにお会いできて良かった。後の懇親会で誰かには暴露したのだが、剣道三段の実力だった私から見て、空手は菅さんは下手であった。あれでは下手に右翼に立ち向かうとやられるから、危ないなあと心配してたものだ。

「『絶望』と隣り合う『希望』とは如何なる謂か？

一代島治彦『ゲバ杜』とその言説・徹底批判」

絳秀実 2024年7月6日、配布資料。

絳秀実氏が当日配布したのは、「『絶望』と隣り合う『希望』とは如何なる謂か？一代島治彦『ゲバ杜』とその言説・徹底批判」である。8ページほどある。これは『映画芸術』(夏号)に掲載予定らしいので、ここでは巨細にわたって批評することは遠慮したい。

この「『絶望』と」云々は加藤典洋が代島映画『三里塚のイカロス』の宣伝用パンフに寄せた言葉である。代島監督がこの度の映画についてインタビューを受けた際にもこれを使った事から、絳秀実氏は「大岩圭之助—加藤典洋—鶴見俊輔」のモンリオール・隠れ革マル・ラインを一括して批判している。加藤典洋があれだけ村上春樹を論じながら、『海辺のカフカ』等がありながら、一貫して川口君事件に触れないのは、大岩圭之助への遠慮なのではないか、と。そして、「内ゲバ」停止の知識人提言(1975年6月、7月)が、高知聡・松崎明らが埴谷雄高らに交渉したもので、その3月に本多延嘉氏殺害後、革マル派から中核派への一方的停戦要求だった事を明らかにしている。この方面に浅学な私としては、まるで手品の種明かしのように爽快で納得できる行論であった。

映画がらみで絳秀実氏が言いたいことは、「『ゲバ杜』は、現在も続く当局と革マルによる統治を正当化している。」と云う事であり、代島監督が今のキャンパスが「全き平和」であると言っていることへの批判である。それはムーゼルマンの平和に過ぎないと。絶望の後の希望というロジック自体が「反革命のロジック」である、と。

ここで、絳秀実氏がこのシンポジウムの為に書き下ろしたもう一つの呼びかけ文があるので、それについて考えてみたい。ホームページにもあったし、呼びかけビラの裏にもある。

この前半三分の一は、川口君事件から早稲田解放闘争、そして樋田毅『彼は早稲田で死んだ』から映画への経過説明である。ここでも「革マル派を背景にした『平和』」でしかないことが強調されている。樋田君が早稲田から革マル派が一掃されたと言ってるのは虚言である、と。映画もそれを拡大化させるように踏襲している、と。

そして、実は、革マル派追放だけではなく、ノンセクトの運動基盤の解体でもあったのであり、2001年7月31日には1500人余の学生が本部キャンパスで抗議行動を行なった事が記されている。それが「日本学生運動史上、最後の大衆的な学園実力闘争」であった、と。

最後に総論として、この大学支配体制は全ての大学、全ての社会領域に及ぶ根源的な現代の課題であり、それが故に、映画・演劇・暴力・セクシュアリティ・差別など多岐にわたる運動のあり方に関わり、このシンポジウムで共に論じ合いたいと結んでいる。

およそこのような趣旨でシンポジウムは呼びかけられている。壮大なビジョンと言うべきである。さて、一言で言えば、絳秀実氏の周りに居られる幾層もの人々がかかる問題意識を中心にマグマのように存在していた所へ、ひょっこりと樋田君が本を書き、それが更に映画になって、巨大な怒りを買ったのだと言えそうだ。本だけならまだしも、映像になると長所も短所も天文学的に拡大され、影響力も甚大になる。危機感を逆撫でしたとも言える。

樋田君や私にしても次の世代の早稲田の闘いには縁がなくて無知である。単純に知らない。そこはまず、学習できるだけの時間と情報を与えた方がいい。彼我の歴史の共有をまず図る必要がある。なぜならば、樋田君にしても私たちにしても、半世紀経ってようやく歴史の上に不十分であれ開示することができたのだ。それをまず受け止めて欲しい。並大抵の事で樋田君にしても私にしてここまで来ているわけではない。次の世代の運動の側も、それと同様に歴史の上に整然と開示した上で共有が初めて可能になろう。それなくして、樋田君にしても歴史を修正したり歪曲したり、現在の何かを正当化するポジションにすら立てない。情報と経験の共有前の、見えない非対称の溝を、この際、解消した方がいい。えてして、後の時代の方がこの非対称を大きくできるので、そこは謙虚であるべきである。

樋田君や私などが早稲田解放闘争の総括としてもものを書いた際、その後の早稲田大学における状況を射程に入れて書いたわけではない。その後の状況、革マル派追放やノンセクトの活動基盤の解体、それでも革マル派が残存している現状などを知った上で、革マル派を背景にした平和を語っているとすれば、それはご批判もごもっともだろう。だが次世代との歴史交流はこれからで期待している。

ただ代島治彦監督と鴻上尚史演出家がどうなのかは私は知らない。1970年代後半に早稲田大学に居た彼らが、そのあと10年から20年後の早稲田の状況を知っていて、あの映画の演出をしたのかどうか、それは御両人に尋ねる他はない。代島監督は新左翼ものをずっと追って来ているので基本知識としてそれはあったかも知れず、鴻上演出家は「ヘルメットをかぶった君に会いたい」とあれだけご執心である。成田空港管制塔占拠事件のその後も詳しく書いているし、小説の中とは言え早稲田大学の非常勤講師を「21世紀になって」やっている。実際に非常勤講師だったのなら2000年前後の事は知ってるはずだ。F教授、E元教授に会った設定になっているが、実在の人物ならば少なくともF教授は現役だから、現状を知っている。

そういうわけで少なくとも樋田君と私などの世代と、代島氏・鴻上氏世代とは切り離してこの問題は考えるべきだろう。代島監督については、映画の切り出しシーンやパンフ、ポスターにあの1969年の写真を使うくらいだから、それくらいの歴史認識のずれは演出上の事として、今の早稲田の政治的実情を知った上で、ストレートに平和な日常として描いた可能性はある。

ブログ「歴史修正/歴史歪曲映画『ゲバルトの杜』を批判する」より

2024年4月30日発売の雑誌「映画芸術」<https://eigei7.hateblo.jp/>に絳秀実・亀田博・花咲政之輔による映画「ゲバルトの杜」徹底批判鼎談が掲載されています。(2024/06/28記)

「週刊読書人」6月28日号 <https://dokushojin.net/>に、水谷保孝さん(元革共同)が、「映画『ゲバルトの杜』／本紙5月24日号巻頭対談批評」として、「早稲田解放闘争をどう描いたのか——「強者」への無力感や絶望へ誘うプロパガンダ映画」を執筆。対談相手(森田暁さん)の問いには答えずに誤魔化し、「事実」を隠蔽する代島監督の姿勢を鋭く告発しています (2024/05/06)

イスラエルのガザ侵略を契機に、世界的に勃発している大学闘争に接しながら、決定的に遅れている日本の学生運動(いや、学生運動のみならず、「運動」全般)にとって、映画『ゲバルトの杜』(代島治彦監督)を——そして、同映画をめぐる製作者サイドに立った言説を——無批判に受容することは、運動の停滞に、

いや後退に加担することである。このことを直視し、歴史を検証しながら、『ゲバルトの杜』を一つのケーススタディーとしつつ、対抗する言説を紡いでいくことは、小さな一歩ではあるが、重要な一歩である。『ゲバルトの杜』は、歴史認識上の多くの誤りと虚偽を含みながら、あたかも「リベラル」であるかのごとく、流通しようとしているからだ。端的に言ってデマゴギーである。多くの方々が、われわれの趣旨を理解し、声をお寄せいただくことを望む。もちろん、われわれは異なった言説に対して狭隘ではないが、無原則に寛容であるわけでもない。

—絳秀実 (2024/05/14)

樋田毅『彼は早稲田で死んだ』を批判する

前田年昭 (組版労働者)

樋田毅『彼は早稲田で死んだ 大学構内リンチ殺人事件の永遠』(文藝春秋、2021年、以下〈樋田本〉と呼ぶ)を読んだときに感じた強い違和感と反発は今も消えない。ついで、映画『ゲバルトの杜』(代島治彦監督、2024年)が公開された。監督は〈樋田本〉によって「ゲバルトの杜」の恐ろしさを知って、「この本を原案に」「内ゲバについてのドキュメンタリー映画」をつくったという(公式ウェブ)。私は見ていない。見ずに批判するのは間違っていると思うから映画についてはコメントしないが、知人がプロデューサーとして映画製作に参加していると知り、〈樋田本〉への批判だけは伝えなければ、と以下のメッセージを託す。

〈樋田本〉は、川口大三郎虐殺事件を革マル派による「内ゲバ」とみる。「彼は早稲田で死んだ」という書名は、「ゲバルトの杜」という醜悪な映画タイトル同様、ここにあらわれている見方、捉え方は、当時の早大当局(村井資長総長)の「派閥抗争」という傍観者的な見方と同じである。これは、歴史的事実なのか。否、彼の死は「内ゲバ」によるものでも「内ゲバ」に“巻き込まれた”ものでも断じてない。「早大当局と結託した革マル派」による学生に対する暴力支配が事件の本質である。「彼は革マル派と早大当局によって殺された」が事実である。行動委員会(WAC)や当時の運動の歴史が、後知恵のきれいごとで改竄され、消されている(旧 早大政治思想研究会有志「川口大三郎君は早稲田に殺された」(『情況』2023年冬号掲載)を参照されたい)。これは歴史への修正、改竄であり、事実を覆い隠すものは、その事実をつくり出した犯人である、という格言はここでも見事にあてはまる。関東大震災時に朝鮮人が“死んだ”、という言説を想定してみれば、歴史の修正、改竄が誰を利するものか明白である。

〈樋田本〉は「不寛容に対して寛容で」立ち向かえと主張する。本のなかでは、78ページ、115ページ、153ページをはじめ253ページにいたるまで繰り返し、書かれている。空語である。自らをジャーナリスト(奥付)と名乗るが、言葉に責を負うプロフェッショナルの言葉とは思えない。イスラエルのパレスチナジェノサイドに抗議する反戦運動の全米、世界への現下のひろがり直面した大統領バイデンは5月2日、「抗議する権利はあるが、混乱を引き起こす権利はない」と反戦運動への弾圧を理由づけた。逮捕者2000人という“混乱”は誰が引き起こしたのか。イスラエルの侵略を後押しするバイデン自身が作りだしたものではないのか。抑圧には反抗しかない。「不寛容に対して寛容で」という主張は、「不寛容」の暴力を容認し、後押しすることに帰結する。

〈樋田本〉は、1994年、奥島総長によって、「早稲田大学は革マル派との腐れ縁を絶つことができた」(256ページ)、というが、これが解決なのか。私の違和感は、光州事件を題材にした映画『タクシー運転手 約束は海を越えて』(チャン・フン監督、2017/2018年)への違和感と通ずる。映画『タクシー運転手』を評価する人が少なくないが、反共国家韓国の現実は何ひとつ変わっていないからだ。いま、日本の大学には、自由と民主主義、自治はない。大学の構内に交番(2013年、同志社大学)など考えられない事態が起きている。いったいどこに、学問研究の自由、大学の自治があるというのか。ジャーナリズム、アカデミズムは、難儀なめに遭わされている人民の、直面している問題の解決に役立ち、闘いを励ますものでなければ、その存在意義はない。本も、そして映画も、である。

自由民権運動の元闘士が「国権」にとらわれ転向をとげた姿を見て、北村透谷は「会ふ毎に嘔吐を催ふすの感あり」と書いた(「三日幻鏡」1892)が、半世紀前に「国際主義と暴力」を称揚しながら今、しれっと「非暴力」と言い出している元活動家に対しても、さらにその時流にのって「当時から非暴力を主張してい

た」と説教しに現れた〈樋田本〉を見ても、私は同じ思いに駆られる。私は〈樋田本〉を許せない。
(2024.5.14)

(2024/05/22)

「ゲバルトの杜」最終試写会で、「これは虐殺者を美化する映画だ！」と叫んで決起した水谷保孝さん（元革共同）が「情況」2024年春号（5月22日発売）<http://jokyo.org/>に映画評を寄稿しています。

(2024/05/24)

「週刊読書人」（5月24日発売号）<https://dokushojin.net/>で、1970年代学生運動史に詳しい森田暁さんが代島監督と対談し、映画と時代背景にかかわって鋭い問いかけを行っています。

(2024/05/26)

「情況」春号（発売中）<http://jokyo.org/>には、菅孝行さん（劇作家・評論家）の「ゲバルトの杜」評も掲載。映画・演劇に精通する菅さんならではの視点で、批判的に論じています。

(2024/05/27)

朝日新聞5月24日夕刊掲載の金原由佳さん（映画ジャーナリスト）の評は「鎮魂歌にしてはいけない」とあるとおり、この映画への根底的な批判だろう。凡百の宣伝評ではない。一読を！ webでも読める。

(2024/06/01)

現在発売中の「人民新聞」（5月20日号）<https://jimmin.com/>では「情況」春号に続いて、水谷保孝さんが、川口事件の驚くべき新事実をあげて批判を展開。前文のイントロもすばらしい。必読です。

上記 水谷保孝さんの「人民新聞」での「ゲバルトの杜」批判。

ようやく完全版がアップされました！必読です。

<https://note.com/jinminshinbun/n/n739f84927d83>

(2024/06/13)

映画『ゲバルトの杜』批評 虚偽と歪曲に満ちた代島「内ゲバ」史観

水谷保孝（元革共同）

NOTE「人民新聞」2024年6月3日 18:31

元革共同 水谷保孝

注...本紙5月20日号掲載の本記事に、著者の校正を反映できていない部分があったため、全て反映したものを掲載します。水谷さん、読者の皆様にわびします。（編集部）

5月25日から一般公開される代島治彦監督の映画『ゲバルトの杜——彼は早稲田で死んだ』が、賛否を呼んでいる。「学生運動の負の側面＝内ゲバを描いた」という評価の一方、「事実から逸脱し、警察・大学当局の目線そのもの」と批判もされる。

そんな中で、後年に早稲田を卒業した編集部関係者から、本作の批評の提案が出た。「内ゲバは肯定できないが、それは当たり前の事で、その先が大事だと思う。本作の構成は、結局今の大学管理体制の肯定にしかかかっていない。川口君事件は、その開始になる重要な事件だ。早大では革マルの大学支配が続き、多くの学生が政治や運動そのものが嫌いになる。ノンセクトも弾圧され続けた。大学の脱政治化の端緒だ。それこそ早稲田大学当局も（無意識的に）狙っていることだ。川口君事件の時には、リンチされている時に大学事務局にも連絡が入ったそうだが無視されたそうだとのことだ。

そこで事件に近い人からの批判を掲載するため、70年安保闘争のDVD『怒りをうたえ』上映会で一緒に読んだ水谷氏に、原稿依頼をした。（編集部）

1972年11月8日、早稲田大学2年生の川口大三郎君が革マル派によって拉致・監禁・リンチ・殺害された。川口君虐殺に対し、WAC(早大全学行動委員会)を先頭に、数千・万余の早大生が全学部で立ちあがった。

同映画は、川口君リンチ殺害状況を、「当時の資料をもとに」「想像力をたくましくして」(『創』5月号代島氏インタビュー)、鴻上尚史氏が脚本・監督した短編劇(16分)が冒頭にある。途中でリンチ・殺害場面が繰り返し流れ、最後も同場面だ。この短編劇が映画の基軸とされ、当時の早大生の証言や、元革マル派の語りなどが配置される。

異様なのは映画の最後だ。激しいリンチを受け、息絶える劇中の川口君の姿に被せ、虐殺側の佐竹実の自己批判書全文の朗読音声が長々と流れる。

逮捕され、ほぼ全面自供した佐竹(革マル派一文自治会書記長)が、警察管理下で書いた自己批判書。それが虐殺行為への禊ぎとされている。

だが川口君の虐殺は、革マル派中枢の根本仁と藤原隆義の指示・同意のもと、村上文男(二文)を現場責任者とした。同派はそれを隠し、「一部の未熟分子の行為」にすり替えた。映画の朗読はそれを追従している。また「社会的責任」の名のもとに、労働者人民が暴力行使すること自体を否定する、警察の論理でもある。

しかもリーダー(村上がモデル)が、「おい、川口」と繰り返し叫ぶ声を、鴻上氏が「鎮魂歌みたいでしたね」と語る。それこそ虐殺の免罪ではないか。未だに革マル派組織および佐竹、水津則子、村上ら虐殺実行者は、誰も早稲田の暴力支配と川口君虐殺への自己批判も謝罪もしていないのだ。

よって本作は「内ゲバ検証」の映画になっていない。両監督が単に内ゲバを映画の題材にし、「川口事件」をその「入口」(代島氏の言)として利用しただけだ。だがそれは実は、中核 vs 革マル戦争を真正面に据えていないことの証左だ。

代島氏の「内ゲバ」論は、中核 vs 革マル戦争の死者が出たケースだけを「内ゲバ」とする誤りを犯している。代島氏は、革マル派による数多の組織的・計画的なテロ——早大内での他党派・無党派活動家への数々のリンチ、東大安田講堂防衛戦からの敵前逃亡、三里塚野戦病院車への襲撃、破防法弁護団への襲撃、東京・杉並区民へのナーバス作戦、国鉄当局と結託した動労革マル派の暴力支配——などを隠ぺいしている。

「権力は中核派の首根っこを押さえているが、わが革マル派は下の急所を握っている」と、警察＝カクマル連合を公言した事が不問に付されている。

革マル派の「革命」とは、「権力と闘う他党派を背後から襲撃・解体すること」と、「党首・黒田寛一を神とする組織づくりの自己目的化」だ。

67年羽田闘争の「十・八救援会」以来、今日も営々と活動する救援連絡センターは、革マル派を救援の対象としない。その理由を、代島氏・鴻上氏は考えたことがないのか。

本作は他面では、私たち中核派のテロル行使の必然性や幾つかの誤りの検証もやっていない。

虚偽と歪曲に満ちた代島「内ゲバ」史観は、警察の反過激派プロパガンダに似ている。

映画『ゲバルトの杜』を批判する

吉永剛志(倉庫労働者/地域・アソシエーション研究所、『NAM総括』)

ここずっと、「内ゲバ」という言葉が、現状を結局は変えたくないためのいい口実になっている。この映画はその典型だ。「内ゲバ」と「正義の暴走」に警鐘を鳴らしているつもりだろう。が、時代錯誤でじり貧もいと

ころだ。真に受けたら真綿で首が絞められるようにやられていけよう。それは何かが間違っていて、物事を直視して思考してないからだ。

1

川口君が殺された場所はここだったのかと、映画を見てまず思った。1972年の川口君事件は、1988年、早稲田大学一年生のころ立花隆の『中核対革マル』を読んで知っていた。しかしランチ場所は文学部事務所の真正面の向かいの教室とは知らなかった。事務所から中庭的な通路をはさみ距離にして5メートル。川口君がランチを受けているときも、休講かどうかなど確認している学生で、事務所とランチ場所の教室の間はにぎわっていたらう。大学事務職員は大学事務を肅々と終え電気を消し、帰路につき、そして隣にいた川口君は死んだ。

私は川口君が殺された20年ほど後、その場所で万葉集や古今和歌集の講義を受けた。私は、日本の美を理解できただろうか？ロシア・アヴァンギャルドやベルリン・ダダのクルト・シュヴィッターズのメルツバウについて講義も受けた。ピンとこない人もいるだろう。ざっくりいうと、ポスト・モダン建築家として著名な故・磯崎新や1983年にベストセラーになった『構造と力』が最近文庫化された浅田彰が褒めるやつだ。68年5月革命あと、69年に構想され、77年開設のポンピドゥー文化センターの初期の展覧会『パリ・モスクワ』『パリ・ベルリン』の新鮮なパースペクティヴの風(ここがネタ元である)が川口君がランチを受けた場所にも届いていた。フランスの新批評(ヌーヴェル・クリティック)と実証主義の対立、ロラン・バルトとレーモン・ピカールの「新しい批評か、新たな詐欺か？」という論争の詳しい内実の講義も受けた。

川口君がランチを受け、殺された場所で、68年フランス5月革命からのアカデミズム制度改革の流れの講義を受けていたということだ。一言でいうと「文化左翼」だ。懐かしくもあり、つまらなくもある。私は面白く受講もした。が、この枠を超えたいともこの頃から無意識的な衝動として思っていた。何か困われたところで行われている。その困われ方に川口君事件は明らかに関係がある。そして、この映画はそれが言語化・映像化できてない。

II

時間をくりあげよう。私は2021年に『NAM総括』(航思社)という書籍を出版した。思想家・柄谷行人が提唱した国家と資本への対抗運動を、「文化的」にでも、趣味でもなく、社会的に公然と実名だして肯定している。生産関係ががつつりくみこまれている職場でも公認されている。それで働いている。それが対抗運動、ってやつだ。

そういう私も学生時代は、大学構内で運動など思いもよらなかった。革マル派の存在でまず社会運動など嫌になる。そして大学は専門学校の高級なもの(朝日新聞社がやっているカルチャーセンターか?)だと割り切り、出席さえすれば何とかなる場所だと思込む。しかしこれこそ、大学、そして社会が手を汚すことなくしてすむ理想の統治体制なのではないか？川口君事件以来、異端で問題を起こしそうな人間は、まずは党派が排除し、学内の疑似平和が保たれる。現在では一見したところ党派さえいらなくなった。大学で「偏向した」「左翼的な」ビラを撒いたら、革マル派ではなく、大学教員が飛んできて、私人逮捕する。冗談を言っているのではない。20年前から早稲田大学文学部キャンパスではそうなっている。そういう事例もちゃんとある。50年前はこの映画のように革マル派が排除したが、20年前から大学教員がその役割を担うようになった。もっとも革マル派は真っ先に排除されていなくなっているわけではない。映画の冒頭でタテカンがど真ん中に出てきた文化連盟＝早稲田の公認サークル連合体はまだ革マル派が隠然と仕切っている。50年前とは表と裏が逆転しただけなのかもしれない。

現在は、大学こそ、脱政治的で「価値中立」な場所の先端となっている。むしろこの大学の中では、疑似福祉空間が築かれ、多様性が尊重され、一人一人がマネジメント目線をもってクリエイティブにイノベーションを、と言われる。学生はチャホヤされる。「お客様」だから当然だ。大学はステーキホルダーと消費者としての学生が集う場となった。しかしそれはこの映画の原案の樋田毅が革マル派支配の自治会に変わって追い求めたような「自治空間」では全くない。コンビニの空間とどう変わるのか？。樋田はノスタルジーにひたらず、初心に戻り、現在、なぜそうなっているかをまず思考すべきだ。とはいえ樋田が川口君事件を扱って書籍化したのは最大限評価し、敬意をもつ。知人で調べて書籍化しようとしていたものがいたが、革マル派の妨害をおそれて(?)出版しなかった。大岩圭之助＝辻信一との対談の実現も驚いた。

ちなみに辻信一は NAM 会員だった。辻信一と深いつながりがある国分寺のカフェスローではさまざまなイベントがおこなわれた。

Ⅲ

『ゲバルトの杜』は、上記のような体制の一環を補完する映画だ、と言わざるを得ない。一言でいうと「正義の暴走」はこわいね～、という感想をおこすための映画だ。断言するが、20代で、ハアハア感心して見ていたら痛い目を見る。真綿で首を絞められるように、追い込まれていく。つまらない人生おくることになる。そもそも「暴力」「非暴力」の区別があまりに通俗であさはかだ。この映画の通りなら、例えば、非暴力直接行動で著名な、アンジー・ゼルダーがやってきた行動はどう位置づけられるのか？ゼルダーは、東チモールの虐殺阻止のために英ホーク戦闘機の格納庫に侵入してコックピットをハンマーで破壊し、原子力潜水艦の実験施設も機材を湖に投げ捨て機能停止させた。いずれも無罪、約200回の逮捕歴がある(『非暴力直接行動が世界を変える』南方新社 2024)。これも「正義の暴走」なのか？過去のノスタルジーに浸っている場合ではない。過去を語るにも、現在の現場に届く語り方があるはずだ。この映画はそういう映画ではない。